

当院における HB s 抗原陰性患者を対象とした HB c 抗体陽性率の実際

○黒岩 奈々美,大越 将貴,根岸 博,長岡 出,林 和樹,柏原 賢治
(群馬県済生会前橋病院)

【目的】B型肝炎ウイルス（以下、HBV）は、HB s 抗原陰性で HB c 抗体ないし HB s 抗体陽性の既往感染例で、肝臓内に二本鎖 DNA（cccDNA）としてウイルスが残存していることが知られており、癌化学療法や移植時の免疫抑制剤の使用により再活性化し、重症肝炎を発症する例が報告されている。HBV 既往感染は HB s 抗原の検査だけでは特定できず、HB c 抗体および HB s 抗体を測定することが有用とされ、これまでも、HB s 抗原陰性者の HB c 抗体を測定したところ、およそ 30%が陽性になったという報告もなされている。そこで、当院での現状を把握すべく HB s 抗原陰性者の HB c 抗体陽性率を調査したので報告する。

【方法】2013 年 4 月から 2013 年 6 月までに当院で測定した 60 歳以上の HB s 抗原陰性者 100 名を無作為に抽出し、HB c 抗体を ARCHITECT i 1000 S R で測定した。

【結果】100 名のうち、HB c 抗体陽性者は 22 名だった。このうち、内科（消化器内科、腎臓内科、血液内科）が 10 名（45%）、外科が 3 名（14%）、循環器科が 3 名（14%）整形外科が 1 名（5%）、健診センターが 5 名（23%）だった。

【考察】調査結果から、対象の 100 名に化学療法などを行った場合、22%の人に再活性化のリスクがあることがわかった。現在、日本での HBV 感染率は約 1%強といわれているが、当院の 60 歳以上の患者の中に HBV 既往歴があると思われる患者が 22%存在することになる。その理由として、この世代では、ワクチン接種などの際に注射針を使いまわしていたことや、母子感染などにより HBV 感染者が増加したと考えられる。また、血液内科や外科など移植や化学療法を多く行う科でも HB c 抗体陽性者がいたため、特に注意が必要になる。当院での HBV スクリーニング検査は、HB s 抗原に比べ HB s 抗体や HB c 抗体の検査実施率が低く、今回調査した中で、HB c 抗体のオーダーがあったのは 100 名中 4 名だった。4 名は全て血液内科であり、化学療法を多く行っている外科などからのオーダーはなかった。化学療法前や免疫抑制剤使用前には HBV 再活性化や劇症化に対する注意が必要であり、HB c 抗体や HB s 抗体の検査実施率をいかに上げることができるのかが、再活性化のリスク低減につながると考えられる。（連絡先 027-252-6011）